

論文要旨

1868年に始まった明治維新は、日本近代化の出発点であり、アジアにとっても「近代化」への第一歩を踏み出したと言える。西欧からの知識獲得及び技術導入等の側面から、明治維新は日本の進歩史において、極めて重要な出来事であったと言える。

日清戦争での敗戦を経て、中国の知識人達は日本へ注目し始めた。1898年に起こった戊戌の政変により、梁啓超は日本大使館に救いを求め、日本国への亡命を果たした。亡命後、梁啓超は『清議報』、『新民叢報』、『新小説』などを創刊し、活発に世論活動を行った。

本研究は、日本に興味を持ち、翻訳活動を行っていた梁啓超の『時務報』、『清議報』、『新民叢報』に掲載された語彙を調査し、日本亡命前に翻訳された『時務報』及び、日本亡命後の『清議報』、『新民叢報』に使用された日本語語彙を比較し、その変化を明らかにしている。また、韓国語での日本語語彙の伝播・定着における梁啓超の貢献についても述べている。更に、日中韓という東アジア近代語彙環流の視点から、進歩史観カテゴリーのキーワードを中心に、これらの語彙はどのように東アジアを渡り歩いたのかを明らかにしようとするものである。

本稿では、序章と終章を含め、全7章で構成されている。以下、各章の内容を略述する。

「序章」では、本稿と関連性がある「近代訳語及び日中語彙交流」、「梁啓超が使用した日本語語彙」と「韓国学界での梁啓超」に関する先行研究を整理し、その成果と問題点を指摘する。続いて、本研究の位置付けを明確にし、研究課題、研究目的、研究方法と研究資料を述べ、論文の構成を提示する。

第二章では、「梁啓超が使用した日本語語彙」について述べる。まず、梁啓超の概略と日本語との出会いについて紹介する。梁啓超の日本語については、梁啓超がどのように日本の知識と接触し、どのように受け入れたのかについて述べる。また、梁啓超の文章の範囲

を『時務報』、『清議報』と『新民叢報』に絞り、掲載された梁啓超の文章を確認し、その中から日本語語彙を抽出する。日本に亡命した前後に使用していた日本語語彙について分析を行っている。

第三章では、「梁啓超と朝鮮」について述べる。朝鮮人に読まれた梁啓超の文章は、主に近代新聞雑誌から収集する。主な刊行物に、『大朝鮮獨立協會報』、『皇城新聞』、『大朝鮮獨立協會報』、『西友』、『大韓自強会月報』、『大韓協會会報』、『大韓毎日申報』、『嶠南教育會雜誌』、『西北學會月報』、『朝陽報』などがある。これらはすべて近代民主主義思想を基本方針とした、独立新聞雑誌である。また、「梁啓超が朝鮮で注目された理由」、「梁啓超の文章を紹介した記事」などについても調べる。梁啓超と彼の文章が朝鮮で注目されていた理由は二つある。一つ目は、朝鮮は当時の中国と同じような苦境に陥り、知識人が文化を推し進め、民衆の知恵を啓蒙するために使用した主な手段となっていたからである。これらの状況が、梁の思想及び文章と噛み合っていたのである。二つ目は、漢文は朝鮮の知識人の基本教養であり、翻訳をする際に便利であるという側面があったからである。しかし、梁啓超の誤訳により、韓国語訳にもその影響が出る場合がある。したがって、梁啓超の日本語翻訳が正しいかについては「十五小豪傑」などの対訳研究を行う。

第四章から第五章では、「近代語彙の環流」について述べる。沈国威(2012, 2014)は、19世紀以降に現れた新語の中で、近代キーワードが観念史の研究対象であったことを指摘し、「進歩史観のキーワード」、「保守、伝統、進歩、進化、積極、進取、主動、革新、改良、改革、発展、解放、近代、現代、進歩、退歩、退化、消極、落後、被動」などの語彙を整理した。「進歩史観のキーワード」を日中韓という東アジア語彙環流の視点から、「冒険、探険、探検(檢)、進歩、進取、保守、伝統」などの語彙の初例、意味変化などを調査しながら、これらの語彙が日本、中国、韓国でどのように使われたのか、どのように環流し定着したのかを明らかにしていく。また、梁啓超がこれらの語彙をどのように受け入れて使用したのかも考察する。

具体的な方法として、まず、中国の漢籍に出典があるかどうかを確認する。出典ありの場合、新しい意味が日本と中国両方での初例を調べることにより、日本が作った新語か、中国側が作った新語かを解明できる。出典なしの場合、日本の近代辞書・新聞を調べ、日本由来の新語かどうかを明らかにする。このように、初出の時期を比較、意味変化の調査を通じて、環流現象を解明する。

第四章では、「冒険」、「探険」、「探検(檢)」について述べる。

近代における「冒険」の意味は、宣教師ロブシャイドの *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* (1866-69) で最初に出現したが、中国語ではその意味のまま定着しなかった。日本は、明治二十年代の翻訳小説で、「冒険」という単語が頻繁に用いられ、日本語として定着していった。一方、中国では梁啓超の翻訳小説「十五小豪傑」、「論進取與冒険(新民説)」、「少年中国説」などによって、「冒険、探険、探検/檢」という言葉がブームになった。「探険」は古くから中国にあった言葉であるのに対し、「探検(檢)」は日本人が翻訳した言葉である。明治二十年代では、「探検」の使用が圧倒的に多かった。中国の「Explore(探険)」は、梁啓超の「新民説」(1902)により広まった。現在、「探険」という言葉だけが中国語に定着した。一方、韓国では、「冒険」と「探険」、日本語の影響もあるが「探検」は、梁啓超の文章によって韓国語に広まった可能性があると考えられる。

第五章では、「進歩」と「進取」について述べる。

まず、近代で使用される「進歩」の対訳は「progress(歴史、社会の発展に促進の作用がある)」である。1870年代の日本辞書及び新聞雑誌でよく見られる。福澤諭吉の『文明論之概略』(1875)により、「進歩」という言葉が普及したことが分かった。一方、中国も1875年頃から「進歩」を使用していたが、使用頻度が低く、日本に関する書籍でしか現れなかった。しかし、1902年、梁啓超の「論進歩」を契機に、中国語で普及し始める。韓国語では、1896年に初めてこの語彙が使われた。1906年以後に使用率が高くなったのは、梁啓超

の文章が翻訳されたのが主な原因だと見られる。

「進取」における近代の新しい解釈は、「努力する、進んで事をする」である。この言葉は日本では、1877年、大阪の「進取社」の紹介で初めて用いられた。1890年代、「開国進取」という言葉がブームになり、1907年の帝国国防方針の重要内容にもなり、「進取」の使用率がピークになったことが分かる。一方、中国では、1902年梁啓超の『新民説』により、普及していった。韓国においては、「自強主義」（1906）という梁啓超の文章の翻訳と梁啓超の文章を読んで、翻訳した張志淵の演説によって、大量使用された。当時、日本語の「進取」は、主に近隣諸国への進取という意味で、政治的な文脈でよく使われていた。中国語ので使われる「進取」という語彙は、梁啓超が指摘した「新民」の重要な特徴の一つであり、主に人の性格に使われた。当時、韓国語は中国語と同じ意味で使用されていたが、現代韓国語ではあまり見られなくなった。

第六章では、「保守」と「伝統」について述べる。

「保守」と「伝統」の近代的な新義は、日本が最初に使用した。しかし、この二つの語彙は、中国と韓国でネガティブな意味で使われることがある。梁啓超は、「保守党」のような政治用語以外は、「保守」を「落伍で腐敗した悪風」と批判した。韓国語でも同じく、政治用語としての「保守」とネガティブな意味での「保守」の両方を使い分けていた。

「伝統」は、現在「tradition」の意味で使用されるが、中国では、1915年頃から1930年頃まで、ネガティブな意味としての「保守」と同じく、「傳統舊習（古い習慣）」という意味で使用されていた。しかし、1930年代からは「優良傳統（昔からの良い習慣）」のようにポジティブな意味で使用されるようになった。韓国では、1920年代から「傳統的特權（昔からの特權）」のようなネガティブの意味で使用されてきた。

「終章」では、各章のまとめ、研究意義などを検討した。さらに、今後の展望などについて論じた。